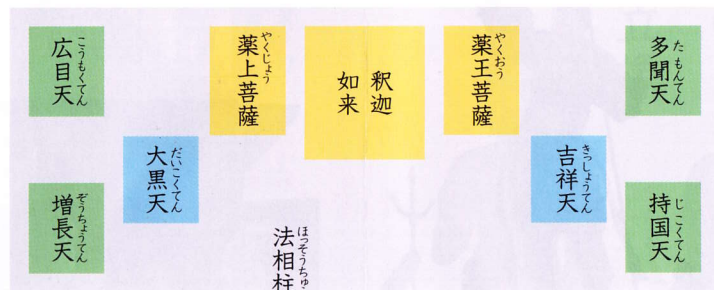


奈良 興福寺 中金堂

中金堂は藤原不比等が興福寺の最初の堂宇として、和銅3年(710)の平城遷都と同時に創建しました。創建当時の規模は奈良朝寺院の中でも第一級であったと言われています。当初は藤原鎌足ゆかりの釈迦如来を中心に、薬王・薬上菩薩、十一面観音菩薩二軀、四天王、さらに養老5年(721)に橘三千代が夫不比等の一週忌供養で造立した弥勒浄土の群像が安置されていました。

創建より6回の焼失・再建を繰り返し、享保2年(1717)に焼失した後は財政的な問題により文政2年(1819)に規模を縮小した「仮堂」を再建。その後は老朽化が進んだため、平成12年(2000)に解体。発掘調査の後、平成22年(2010)の立柱式、平成26年(2014)の上棟式を経て、平成30年(2018)に再建落慶を迎え、創建当時の様式で復元されました。



諸尊
配置図

中金堂

単層裳階付き 寄棟造
桁行9間 梁行6間
創建…和銅3年(710)
再建…平成30年(2018)



PHOTO : 飛鳥園、堀出恒夫(法相柱)

重要文化財

木造 大黒天立像

像高 93.8cm
 素材 一木造 彩色 彫眼
 鎌倉時代



Daikokuten
(Kamakura Period)

財宝神として信仰

通常、大黒天は「打ち出の小槌」を持ち、円満な顔で俵の上に乗る姿を目にしますが、それは後世に流行した容貌です。元々は大自在天の化身として、怒りの顔をした厨房の守護神でした。本像は厳しい表情を残し、頭巾をかぶり、短い袴をつけ、袋を左肩に背負って直立します。表面には鑿跡が残り、内刳りを施さず、一材から彫出する丸彫りの像です。

法相柱

高さ約6.0m
 周田約2.45m
 岩絵具 紙本着色
 祖師画完成…
 平成28年(2016)
 祖師画貼上げ…
 平成30年(2018)



法相の教えを伝える

法相宗の祖師を描き、教義の系譜・伝灯を示します。創建堂宇の柱に描かれ、焼失と再建を繰り返す中、後世まで引き継がれていた「礼拝の対象」です。

- | | | | |
|---------|----------|---------|--------|
| 1 無著菩薩 | 2 世親菩薩 | 3 護法論師 | 4 戒賢論師 |
| 5 玄奘三蔵 | 6 慈恩大師 | 7 淄州大師 | 8 濮陽大師 |
| 9 玄昉僧正 | 10 善珠僧正 | 11 別当行賀 | |
| 12 真興上綱 | 13 権別当蔵俊 | 14 解脱上人 | |

木造 釈迦如来坐像

像高 230.9cm
 赤尾右京作 松材 寄木造 漆箔 彫眼
 文化8年(811)・江戸時代



Shaka Nyorai (Edo Period)

伝統ある興福寺本尊

中金堂創建当初の本尊は、藤原鎌足が蘇我入鹿の打倒を祈願して造立した釈迦如来像と伝えます。現在安置される像は5代目。平成30年の再建にあわせ、修理されました。二重円光の透かし彫りの光背をつけ、宣字形の裳懸座に結跏趺坐します。左手は膝の上で掌を上五指を伸ばし、右手は臂を曲げ五指を伸ばし前方に向けます。

興福寺 中金堂

年中無休
9時～17時(入堂は16時45分まで)



興福寺は、藤原氏の氏寺として和銅3年(710)の平城遷都とともに創建されました。五重塔、三重塔、東金堂、南円堂、北円堂などの建造物、阿修羅立像や銅造仏頭、無著・世親菩薩立像、金剛力士立像など数多くの国宝・重要文化財が現在に伝わります。また、《天平の文化空間の再構成》を合言葉に、境内整備事業を進めています。

法相宗大本山 興福寺

〒630-8213 奈良市登大路町48

Tel (0742) 22-7755

<http://www.kohfukuji.com>

重要文化財
木造
薬王・薬上菩薩立像
像高 薬王菩薩像：3,622.0cm
薬上菩薩像：3,600.0cm
素材 寄木造 漆箔 彫眼
建仁2年(1202)・鎌倉時代



Yakujō Bosatsu
(Kamakura Period)

Yakuō Bosatsu
(Kamakura Period)

心と身の病を治す

良薬を人々に与え、心と身の病気を治した兄弟の菩薩。釈迦の脇侍として薬王・薬上を置くのは古式と言われています。両像は鎌倉再興期に建てられた西金堂の本尊(釈迦如来：現存の木造仏頭)の脇侍でしたが、享保2年(1717)の焼失後、中金堂の本尊脇侍として迎えられました。豊かな肉づけ、整然とした姿に、奈良時代の乾漆像を思わせます。

国宝
木造
四天王立像
桂材 寄木造 彩色 彫眼
像高 1,972～2,066cm
鎌倉時代



The Four Heavenly Kings (Kamakura Period)

鎌倉再興期の傑作

いずれも沓を履いて岩座に立ち、力強くダイナミックな動きが特徴です。近年の研究により、像の肉色などから、従来持国天と呼んでいた像は増長天、増長天は広目天、広目天は持国天であることがわかりました。かつて南円堂に安置されていた四天王像で、もとは北円堂にあったという説がありますが、断定には至っておりません。*持国天(1)・増長天(2)・広目天(3)・多聞天(4)

重要文化財
厨子入り木造
吉祥天倚像
像高 643cm 厨子高 1,023cm
寛慶作・命尊筆
素材 一木造 彩色 彫眼
南北朝時代



Kishshōten
(Nanbokucho Period)

極彩色の吉祥天曼荼羅

吉祥天はヒンドゥ教の女神で、仏教に取り入れられてからは美と幸運、富と繁栄、財産と智恵を授ける神として信仰されるようになります。彩色など表面の仕上げが良く残っており、厨子の扉には梵天・帝釈天、奥壁には七宝山図が極彩色で描かれます。台座裏の墨書銘によると本像は暦応3年(1340)に施入され、中金堂に安置したことが分かっています。